

# 何ものか是れ宗教(承前)

加 藤 玄 智

又斯う云ふ風に宗教を考へる人があります、例へば基督教の方面に就いて考へますと、一番初にエホバの神と云ふものがあつて天地を造つたと云ふことがバイブルに書いてある、所謂創世記に書いてあるそれから又アダム、イブと云ふ人間の初の先祖が神の命に背いて知識の木の實を食つて、遂に神の罰を受けて其れが遺傳罪として傳はつて、今日の人間も生れながらにして先祖の犯した罪を有つて居る、それを基督と云ふ人が出て来て、自分が神の子でありながら進んで十字架に磔になつて其アダム・イブの遺傳罪と云ふものを救つて呉れたのであると、斯う云ふのが基督教の説く所である、斯う云ふものがなければ其れは宗教でないと云ふ風に考へる人があります。而して神道の如きは一向さういふ遺傳罪などいふことは云つて居らない、又神があつて大工が家を造る様にして天地を造つたと云ふことも云つて居らない、それだからして神道は宗教といへぬと、斯う云ふやうに議論をされる人がある。それから又佛

教にしましても、眞宗の如き教になりますと五障三従の女人と云つて、女は非常に罪の深い所のものであるが男も煩惱の罪を有つといはれて居る。又釋尊の教に立復つて考へて見ましても、前に申しました通り一切を煩惱永く盡くすことが必要だと云はれてをるやうに吾々に煩惱と云ふものがある。之を佛教哲學の語で言へば無明と申しますが、無明は一種の罪と云ふてもよいので、さう云ふものが有ると云ふことを佛教でも容すのであります。所が、さう云ふことを説かないものは宗教ではあるまい、日本の神道などはさう云ふことを少しも云つて居らぬ、成程大祓の祝詞などには天津罪國津罪といふことを云つて居るけれども、併しそれは人が此世の中に於て過つて犯した罪であつてアダム、イブ以來の遺傳罪と云ふものではない、だからして神道などで云ふ所は餘程宗教とは違ふやうである、是れは宗教以外に置いた方が宜からうと、斯う云ふ議論をされる方があります。併乍ら今申しました創世記の話とか又は遺傳罪の話の如きは是れは一種のドグマ即ち教義であつて、基督教が猶太から起つて段々小亞細亞を経て羅馬に傳はり、其處等の國を経て行く間に段々教義として築き上げられた結果なので、或一派の頑固な基督教徒が、神は六日にして此世界を造つてしまつたと云ふやうなことを、言葉通りに六日間と云ふことを信じなければならぬとか、又基督が死んで昇天したことを信じなければならぬと云ふ様な、随分やかましい所謂信仰箇條を鼓吹しますけれども、併し今日の進んだ基督教ではさういふことは言はない。殊にユニテリアンなどは、基督も偉いことは偉いけれども、基督教徒が思つて居つたやうな特別の意味に於て

の神の子ではないと云つてを。兎に角今申したやうなドグマを楯に取つてそれを基督教の特色とする様なのは先づ今日の進んだ基督教には無い。

又歴史的に考へますと、創世記がバビロンの一番初にありますが、併し創世記が必しも古いものではない。舊約全書の中にデボラといふ女の豫言者がイスラエル國民の勇氣を鼓舞した歌があります。其デボラの歌が一番古いものであると云ふことは今日舊約全書を批評する人の多く一致して居る所であります。それから廣く申しますと創世記の神話と云ふものはバビロニア、アッシリア邊りの話から段々變化して彼處に持つて來たので、其以前から有つたか何うか十分なことは分らぬとしても餘程後のものである。決してイスラエル民族が一番初にわんな信仰を有つて居つたのではない。イスラエル民族は從來非常に樂天的の人民であつて、さうして國家を保護する爲めに敵國外患に對して戰爭をすることに力めて居つたので、決して一種のメンチメンタルな、憂鬱な、宗教論や或は教理のやうなことにクヨクヨして居つた人間ではない。それであるから、神が六日間に此世界を造つてしまつたとか、或はアダム、イブの遺傳罪が自分等に傳はつて居るとか云ふやうな考は、彼等がバビロニア、アッシリアの爲めに苦しめられて遂にチグリス河とかエウフラテス河の畔に行つた頃から起つたものであつて、其以前には決してさう云ふ考はなかつたのであります。それから印度のアリアン人種が段々インダス河の上流から這入込んで遂にガンヂス河の上流に參つたのであります。其インダス河の上流で信じて居つた宗

教には決して靈魂や輪廻と云ふ考はない。佛教の教義のやうな靈魂の考と云ふものは婆羅門教にもありませんけれども、是れは彼のアリアン人種がガンヂス河の畔に參つた後のことである。彼等はその初に於ては唯々天然現象を崇拜して、太陽の神とか或は嵐の神とか云ふものに讚美歌を捧げて、是れだけの御供物を上げますからどうか犢を澤山與へて下さいと云ふやうなことを祈願して居つたので、之がインダス河の上流に居つた時代の彼等の信仰であつた、決して所謂遺傳罪のドグマのやうなもの或は創世記の神話のやうなものはない。それでも矢張印度人は宗教的天才である。今世間の一部の人が宗教の大切な要素として居るものを缺いで居つて而もそれが宗教的天才であるから、さうすると世間の一部の人の宗教の考は勝手の解釋である。近來の比較研究に於て明かになつて居るにも拘らず、さう云ふことは知らないで唯自分勝手にバイブルを讀んでそのまゝやるから随分勝手な宗教の解釋が出来て、それがバイブルの根本思想の如くに思つて其れを楯にして宗教を觀るから甚だ事實と違つた結果を來して居ると思ふ。是れは大なる誤解であつて而もそれが亦世間では本當の様に思はれてをる。此點から觀ても、もう少し専門家が自己の研究を披瀝して其一斑を示す必要がありはせぬかと思ふ。

さういふ風に考へますと、世間の人の考へて居る宗教に對する概念は非常に間違つて居りまして、纔に基督教の一部とか佛教の一部に當嵌まるもの、極端に言へば、平田篤胤が今讀んだやうなものを佛教と思つて之を痛罵して居るのと同じである。

尙終りにても一つ世評に就いて申して置きますが、從來日本の古風の國學者とか或は漢學者の中に斯う云ふことを申す人があります。日本の神様と云ふものは支那の所謂神とは違つて居る。支那で神と云ふのは所謂神妙不可思議の理を云ふので、私共の言葉で翻譯すれば、宋儒が理と氣の説を立て、居ります、その宇宙の根本義を理と云ふて居る、さういふものが即ち神であつて、隨て之は天然の法則ナチュラローとでも謂ふ可きものである。神妙不可思議の理が神である。然るに、日本の神と云ふのは皆有形的であつて、先づ人間を神として居る、太陽が神であると云ふことも勿論である、又祖先が日本では神になつて居るのみならず、山の神、川の神なども皆有體的で、少くとも體の有るものである、だからして日本の神と支那の神とは非常に違ふ。斯う云ふことを標準にして日本の神の特色を擧げて居ります。成程宋儒の理の説と日本の神祇の觀念と比較すればさう云ふ風に言へるのは尤もであると思ふ。所が段々比較研究をして行きますと、大變日本の神様に似たやうな神様が此世界にあることを發見するのであります。殊に希臘のホーマーの詩の中に歌はれた神様と云ふものは餘程日本の神様に似た所がある、大變人間的の性質を具へられると云ふこともあります。又天然をも神として居る。丁度日本に山神とか海神があるが希臘にも山の神とか或は海の神があると云ふやうな風で、其意味に於ては必ず有體的であると思ふ。決して神妙不可思議の理ではない。のみならず日本で人を神として祭る。これが日本人の一つの神を考へる特性でありますけれども、希臘でもさういふことがあります、有名なアレキサンダー大王が東西

文明を調和する爲めに自分はツォイスアモンと云ふ神の化身であると云ふことを言出した。ツォイスと云ふ希臘の天の神とアモンと云ふ埃及の太陽の神とを一身に結付けて居る。當時世に知れてをる東西の偉い神様を二つ結付けて一つにして其れの化身であると自ら云ふたのです。さうすると矢張人間の中に神が見出される譯でありまして、アレキサンダー大王が第一其例であります。それから又羅馬には皇帝崇拜と云ふことが非常にあつて、例の有名なシーザーは勿論のこと、又彼のアウグスツス皇帝の如きは生きて居られる内から神として崇拜されて居つた。さうして小亞細亞のプリエネなどの土地で發掘された結果に依りますと、恰も基督教徒が耶蘇基督に頌徳表を奉る様な言葉をアウグスツス皇帝に奉つて居る碑文が發見せられた、帝は明かに神とされて居つたと云ふことが分る。又もう少し幼稚な野蠻民族例へば濠太利あたりの土人の中には、人間が神になると云ふことが中々あつて、殊に酋長の如きは神と崇められる。さうして酋長の居る周圍には供物などを獻げる、時には人身供犠として人間を生きながらかう云ふ神に獻ると云ふこともある。さうすると人間を神と視たと云ふことが随分諸方にある譯です。隨て是れは有形的有體的の神であつて無論神妙不可思議の理ではない。さうなると神は神妙不可思議の理を云ふのであつて日本の神は然う云ふものでないから支那の神と違ふといふことは言へますけれども、世界一般の宗教と比較するときは其れを以て日本の神様と世界の神様とが全く一になつてしまふから區別が付かぬと思ふ。それで現代は色々斯う云ふ新しい方面の材料が這入つて居りますから、其等を觀來つて

さうして宗教と云ふ概念を何處に置いたらよいかと、斯う云ふことを考へなければならぬことになつたので、随分面倒な厄介な仕事でありますけれども、それに依つて宗教の本性が明かになるのでありますから、専門家は餘程努力して材料を蒐めて而して後に宗教と云ふものは畢竟如何なるものであるかと云ふ概念を作らんければならぬと思ひます。

さう云ふ風でありまして、私共はどうも世間で考へて居る所が不十分である様に思ふのであります。そこで然らば宗教は何う云ふ風に觀たら宜いか、斯う云ふことになりますと、それは甚だ平凡であるのです。決して私共の新しい考ではないが、地獄極樂とか靈魂とか云ふやうなことよりも、宗教は神と人間との一種の關係であると、斯う云ふのが宗教の一番適切な定義であると私は思ひます。是れは今日新たに私が言ふのではない。「之は教父時代に出ましたラクタンチウス Lactantius と云ふ神學者の説にもあります通り決して新しくはない、又歐羅巴の學者が大分言つて居るのでありますして決して新しくはありませぬが、私は其れが宗教の概念としては一番穩當であると思ひます。斯う云ふ風に言へば佛教にも宗教の考が當筈まりまするし、基督教にも無論當筈まります。基督教は勿論「神と人間との關係」を説くのである、又佛教も一例で云へば「阿彌陀如來と人間との關係」であつて、阿彌陀如來に救はれると説く、斯く神と人間との一種の關係と云へば總ての宗教を網羅することが出来ると思ふ。所謂首狩を専門にして居る臺灣の生蕃の中にも一種の靈魂ウツフのやうな考がありまして、其スピリット即ち一種の神であ

りますが其れと野蠻人との關係が矢張宗教であると、斯う云ふことにすれば宗教の一番範圍の廣い定義であると思ふ。そこで私は何うしても比較宗教學上から宗教とは何であるかと云へば「神と人間との一種の關係である」と斯う云つて置きたいと思ふのであります。

斯様に申すと此處で直に宗教と倫理との區別も附くのであります。今日の進んだ宗教に於ては宗教と道德とは密接なる關係があつて離すことが出来ない。例へば先程申しましたやうに一切煩惱永く盡きた状態が涅槃である其れが宗教の理想であると云ふならば、人心の垢をすつかり去つてしまつて道心の清きに住した所が宗教の極致である、其意味からは宗教と道德とが一に歸してしまふとも言へる。又基督教にしても「心の清き者は幸なり其人は神を見ることを得べきが故に」と云ふからには矢張宗教が道德に喰込んで居ると思ふ。進んだ宗教に於ては道德と宗教は二にして一と云ふ方面がありますけれども、併乍ら又宗教的經驗と道德的經驗とは違ふ。私は宗教を定義して神と人間との一種の關係と申しましたが道德は五倫五常と云ふやうなことを説くのでありますから、さうなつて來ると人間と人間との關係であります。父子親あり君臣義ありと云つた所がそれは人間と人間との關係である、人間以上の神との關係ではない。此處に宗教と道德との區別があると思ふ。そこで神と人間との一種の關係を宗教と云ふならば、道德といふ宗教に能く似た事實と宗教との區別が明瞭に付くので、大變好い定義であると思ふ。それであるから例へば禪宗などに於て不思議、不思議といふことを云ふ、善惡は道德の範圍である、



である所の禪宗の方では不思議、不思議である。禪は現象世界の事を總て妄想分別の結果とするから、其の妄想分別を超越した所が禪の禪たる所である。善と惡の區別を一步進んだ所に宗教の本體があつて其處に本來の面目現前する所があると、斯う云ふ風に言ふのが禪宗でありまして、それは確に道德と違つた現象であると思ふ。それで「神と人間との關係と云ふ風に「宗教」を觀ると非常に道德との區別が付くので、私は其の方から觀ても宗教の此の定義が宜いと確信して居るのであります。

唯々この定義は宗教を外部から觀た定義であります。大風呂敷を擡げたやうに觀れば佛教から基督教から總て此の定義中に這入りますけれども、之れを他の方面から申上げなければならぬのは、神と人間との一種の關係と云ふ點であります。神と人間との一種の關係と云ふのは非常に抽象的な言方であるので、其の内容を規定する必要がある。一種の關係と云ふのは何う云ふ關係か、其の關係を明かにする所に宗教の所謂精髓が見えるであらうと思ふ。それで私は神と人間との一種の關係と云ふことを宗教の形式的定義と云はうと思ふ。宗教の形式を規定した定義であると思ふ。それで一種の關係と云ふことは何なるか、斯う云ふと面倒でありますが、私は簡單に申して、之を神と人間との融合歸一の状態であると言はうと思ふ。そは神と人間が融合調和すると言つてもよい。神が人間と結付く状態即ち神と人間の融合歸一の状態が宗教である。或は又神人の共在俱存と言ふてもよい。普通の言葉で言ふと神と人間が共に居ると云ふ觀念であります。道德を實行するには神が有つても無くつても出来る。若し是れが出来

ぬとすれば今日の小學校などで倫理は教へられない譯である。而も今日小學校で道德だけは教へる。即ち神が有つても無くつても道德だけは實行が出来ると云ふことを證明して居る。唯々其の道德實行の實力の強いか弱いかと云ふことは問題でありませうけれども之を實行することは出来るのであります。併し宗教は然うでない。神無しでは宗教は成立しない。宗教は神と人間の融合歸一或は共在俱存の状態である。我は神と共に居るのである、我は神の内に住まつて居るのであると云ふやうな意識が是れが宗教の特色であると思ふ。是れを私は神人の共在俱存の状態であると言はうと思ふ。或は従來の言葉を借りて申せば、神人の感應道交と言つてもよい、西洋では之を聖交——神聖な交と言つて居る。或は少し神祕的に言ふ人は之を神人の祕的交通と云ふ語を以て言ひます。私は神人のコムニオンと云ふ所から神人同交と云ふ語を使ひたいと思ふ。神人の一種の關係と云ふことは何う云ふ方面からも付いてくる。此處が宗教と哲學の區別が明瞭に付く所であつて、私の方面では非常に此處を強く言ひたい。哲學も矢張絶對と人間との關係である。哲學に於て宇宙の本體とか絶對とか云ふのは其れと人間の關係と云ふことになる。けれども宗教は絶對を神と見てさうして神と人間の融合接觸と云ふことになる。それが即ち宗教であつて宗教は神と人との融合接觸する實意識である。唯々さういふことを口で言ふばかりではない、自身が實際さういふ位地に在ると云ふ氣分になる、それが即ち宗教である、斯う私は宗教を見たいと思ふ(未完)